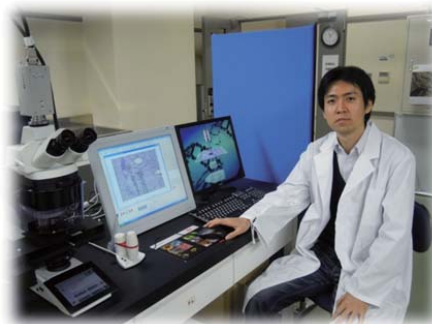


着任挨拶

古代学学術研究センター特任助教：河原一樹

本年度より、古代学学術研究センターの特任助教として着任いたしました。この場をお借りして御挨拶申し上げます。本センターでは、専門であるタンパク質科学の知識を活かして、古代史資料の自然科学的分析法の確立を目指した研究を中心に進めています。

私は大学院時代、大阪大学大学院薬学研究科高分子化学分野に所属し、小林祐次教授（現・大阪薬科大学教授）、大久保忠恭准教授の指導の下、様々なタンパク質の3次元構造や溶液中での物性の解析を行ってきました（図1）。特に、哺乳類中に最も多く存在し、皮膚や骨の主成分として知られる繊維タンパク質コラーゲンに注目し、その構造から機能を解明する研究を行ってきました。コラーゲンは、繊維構造を採るだけでなく、ハイドロゲルやゼラチンなど温度調節等により様々な形態変化を起こすことから、多機能素材として幅広い分野に応用されている物質です（図2）。この多機能性に魅かれ、大学院卒業後は日本学術振興会の特別研究員としてコラーゲンの研究を継続してきましたが、特にコラーゲンを素材とした材料の従来とは異なる分野への応用可能性を模索していました。



そんな折、奈良女子大学古代学学術研究センターが主催するシンポジウム「膠が融合する文化財と自然科学」に参加し、各先生方の講演の中で、膠とその主成分であるコラーゲンが、文化財の優れた修復剤となるだけでなく、歴史史料に科学的根拠を与える物質となり得る可能性を秘めていることを知り、大変感銘を受けました。更に、その為の研究プロジェクトが古代学学術研究センターにおいて文理の垣根を越えて始まろうとしているところであると知り、是非そのプロジェクトに参加したいと思い至りました。今回、当センターの一員として働かせていただける機会を得たことを大変嬉しく感じています。現在、膠の分析の真最中です。若輩者につき関係者の皆様には御迷惑をかけることも多々ありますが、ご指導を賜りますようお願いいたします。

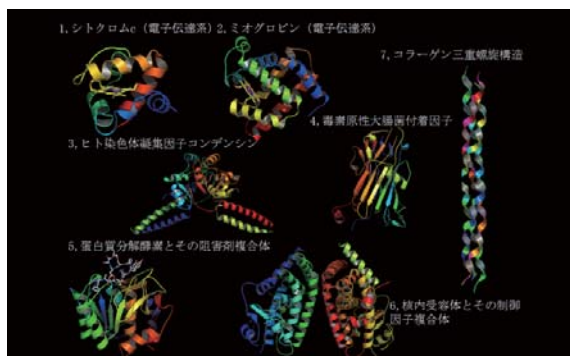


図1. 様々なタンパク質の3次元構造

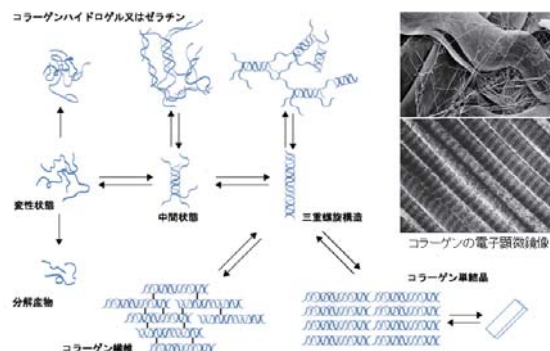


図2. コラーゲンの形態変化

## シンポジウム・研究会報告

### 古代学学術研究センター研究会

第1回 遷都から見る日本史 (2010年6月21日)  
「遷都研究の現状と課題」 館野和己(奈良女子大学)

2010年に平城遷都1300年を迎えたのを機に、遷都問題を取り上げました。7世紀以前は天皇代わりごとに都を変える歴代遷宮という慣行がありました。その理由に関する諸説を検討し、また天武天皇がそれにピリオドを打とうとしたことを論じました。さらに藤原京から平城京への遷都をめぐる、その要因を国内的・国際的視野から検討するとともに、遷都は新都造営のどの段階で行われるのかなど、残された研究課題を提示しました。(館野和己)

第2回 都市を生きる人びと (8月5日)  
「京職による京内人民の管理—京の浮浪人を中心として—」 穴戸香美(人間文化研究科博士後期課程)  
「古代和歌と庭園—萬葉後期を中心に—」

奥村和美(奈良女子大学)

平城京には、そこに本貫をおく京戸のみならず、諸国で戸籍に登録されたまま在京する官人や、税の運搬、造営事業のために上京した人びとなどがいました。穴戸報告では、そうした京の実態が明らかにされるとともに、国家が彼らをいかに管理しようとしていたかが、浮浪人に焦点をあてて論じられました。そして、浮浪人に関する政策の不備と、彼らが雇用労働に従事するなどして京の維持機能をになっていた現実をいかにとらえるか、おもに京戸の分析から論じられてきた京という空間の位置づけなどをめぐって、議論がなされました。

続く奥村報告では、ニハ・ヤド・ソノ・シマなどの語や景物が『万葉集』にどのように詠われているかが考察され、「萬葉後期」すなわち平城京遷都後に、庭園築造の盛行にともなって、和歌表現が変化するさまが論じられました。討論においては、景物をリアルに捉える視点と漢詩文の影響がどのようにあらわれてくるのか、さらに自然の景観を讃えるかたちで京が賛美されるのはなぜか、といった点が問題化されました。(西村さとみ)

第3回 遷都から見る日本史2 (9月29日)  
「中世成立期の「帝都」観と福原遷都」

森由紀恵(日本学術振興会特別研究員)

福原遷都に関しては、近年、それを平氏政権の政

治構想のなかに位置づけ、とらえなおそうとする研究が盛行をみえています。しかし、遷都そのものの政策的意義は、平安京までの遷都論を援用し論じられていることが、報告において批判されました。そして、福原遷都や京について語った史料の収集・分析の結果から、当該期の京の観念をふまえて福原遷都の歴史的意義を問う必要があることが論じられました。

討論もまた、京とはいかなる場であり、人びとが何をもって遷都とみなしたのかなど、提示された史料の読解をめぐる展開され、当該期の京をめぐる観念を構造的にとらえることの重要性が確認されました。(西村)

第4回 古代を見なおす (10月14日)  
「奈良時代の資財帳と仏教政策—天平十九年帳を中心に—」 中川由莉(人間文化研究科博士後期課程)

寺院が作成する資財帳は、什宝物や寺領などの目録であるのみならず、それらの資財の来歴なども記した貴重な史料です。報告では、その資財帳が天平19(747)年に国家の命によって作成され、後世に残されたことをめぐって考察がなされ、奈良時代の仏教政策と対する寺院のありようが論じられました。

今日に伝わる資財帳の数は限られており、そこには後世の加筆も見られるといえます。そうした制約のなかで史料をいかに読むのか、すなわち史料の読解をめぐる、討論は展開されました。(西村)

このほかに下記の研究会を開催しました。

第5回 古代を見なおす2 (2011年1月25日)

「上古の時空」西谷地晴美(奈良女子大学)

第6回 平城京に住む人びと (3月25日)

「8世紀の京戸・京貫と京職の職務」 穴戸香美

「僧綱の管理行政—その管轄範囲を中心に」中川由莉

※報告の概要は次号(No.3)に掲載します。

### シンポジウム 「歴代遷宮と古墳の思想」

2010年11月27日

報告

「歴代遷宮の理由とその克服」館野和己(奈良女子大学)  
「律令期王宮の成立、ならびに古墳消滅の意味—特権的な座に位置する現身の王が生まれるまで—」

大久保徹也(徳島文理大学)

「稲荷山鉄剣銘の解釈を中心に」 若井敏明（関西大学）  
「首都変遷の原理」 小路田泰直（奈良女子大学）

本シンポジウムは、〈平城遷都 1300 年祭〉に沸く奈良の地において、遷都を歴史的にとらえなおす試みの一つとして実施されました。

まず、趣旨説明を兼ねた館野報告では、歴代遷宮の理由に関する諸説が紹介され、天皇の代替わりごとにすべてをリセットするという循環的な時間意識の内実を問うことの必要性と可能性が指摘されました。加えて、宮の跡地に宮が営まれるという 7 世紀後半の現象を、歴代遷宮の克服過程に位置づける見解も示されました。

次に、大久保報告において、王の特権化という観点から、古墳の築造や宮の造営の意味が論じられました。すなわち、先王の遺骸を所有し、古墳を築いてそれを埋葬するという行為を通して王の正当性が確保される段階から、現身の王がそれとして特権化される段階へと移行することと表裏の関係において、特権的な座を備えた儀礼空間を有する律令期の宮が形成されたというのです。

続いて、歴代遷宮はあったのかと問いかけ、歴代天皇の宮とともに皇子の宮にも検討を加えられたのが、若井報告です。氏によれば、歴代遷宮とは、大王領ともいべき地域に分布した皇子の宮が、彼の即位にともなって王宮となるという現象であり、即位をめぐる政治的動向が影響を及ぼしていました。したがって、大王・天皇の後継者選定の方法が変われば、宮のありかたもまた変化したであろうと論じられました。

そして、小路田報告では、宮の立地が王の性格をあらわすものとして読み解かれました。大和は日本列島のほぼ中央に位置し、〈等距離性〉において選ばれた地であり、そこに居する王は同格者中の第一人者でした。それゆえ、王は死によって差異化され、死した王の偶像として古墳が築かれたといえます。さらに、以後の宮の移動は琵琶湖畔へと北上する傾向を有しており、それは経済中心を掌握して〈偏り〉を創出し、王の超越化を図るものであったとされました。

歴代遷宮の理由には諸説あり、いまだ見解の一致をみていません。そうした現状をふまえて、超越的な王の創出など、新たな観点から遷宮に光が当てられました。提起された論点をどのように深めていくのが、今後の課題といえるでしょう。（西村）

国際講演会 「中国古代墓誌の起源と変化  
—西安碑林博物館蔵品を中心に—」

2010 年 9 月 17 日

残暑厳しい 9 月のなかば、西安碑林博物館副館長の韓釗氏に「中国古代墓誌の起源と変化」と題してご講演いただきました。奈良文化財研究所に招聘され日本に滞在中であった韓氏は、かつて本学で研究をされていたこともあり、本講演会が実現の運びとなりました。

韓釗氏はまず、中国文献学における墓誌の史料的位置づけを述べられたうえで、古代墓誌の①起源、②形の変遷、③書かれている内容と文体、④文様について、それぞれ説明され、あわせて、西安碑林博物館所蔵の墓誌のなかから何点かを、その映像とともに紹介されました。

次に墓誌をめぐる研究の動向について、①南北朝から隋唐期の王室と氏族、②南北朝期の地理や行政区域、③隋唐期の都城、④唐朝の門閥の系譜と婚姻関係、⑤中国と海外との交流、⑥仏教の展開、⑦官職制度などの研究に墓誌が活用されていることを、具体例を交えて語られました。

墓誌を残した人びとの階層やその内容、出土状況などに関する質疑応答がなされたほか、おもに石材で作られ、1 万点以上もの残存が確認されている中国に対し、日本では銅板に文字が刻まれ、その数もわずかであるといった両国の墓誌の差異が改めて確認され、なぜそうした差異が生じたのかをめぐって、活発な議論が展開されました。

なお通訳は奈良文化財研究所の今井晃樹氏にお願いしました。（西村）



韓釗氏（右）と今井氏（左）

若手研究者支援プログラム  
「萬葉集原本への道」

2010年8月28日～30日

今回で5回目となる若手研究者支援プログラムを、2010年8月28日(土)～30日(月)の3日間にわたり開催し、学内外の多くの若手研究者らが参加しました。これには(財)奈良県万葉文化振興財団万葉古代学研究所が共催として加わりました。内容は以下のとおりです。

8月28日(土) 特別講義「萬葉集の伝来と諸本」  
「万葉集諸伝本の再整理」

田中大士(文部科学省教科書調査官)

「書物」としての万葉集古写本—新しい本文研究に向けて— 小川靖彦(青山学院大学)

田中氏は、非仙覚系伝本中の平仮名訓本と片仮名訓本との関係、及び非仙覚系の諸本と仙覚本との関係を講義されました。小川氏は、平安時代の古写本の中で特に金沢本を取り上げ、その本文の問題を講義されました。本学及び他大学の、若手研究者及び大学教員等41名が参加。



講演中の小川靖彦氏

8月29日(日)  
公開講演会・シンポジウム「萬葉集と山城国・歌木簡」

「万葉歌にみる恭仁京と馬場南遺跡のトポス」  
伊藤太(京都府立山城郷土資料館)

「山城国と万葉歌」坂本信幸(奈良女子大学名誉教授)  
「恭仁京址調査の現在と馬場南遺跡」

中島正(木津川市教育委員会)

「馬場南遺跡出土歌木簡」  
栄原永遠男(大阪市立大学名誉教授)

「歌木簡と万葉歌にみる文字表記と字余り」  
毛利正守(皇學館大学)

コメンテーター : 奥村悦三(奈良女子大学)

館野和己

コーディネーター : 奥村和美(奈良女子大学)

伊藤氏、坂本氏、中島氏は、山城国の恭仁という場所の意味を、地理・景観或いは信仰を含めてそれぞれの見地から考察されました。栄原氏は、歌木簡にうかがえる歌を書くこと意識について、また毛利氏は、字余りと関わって歌の誦詠法について述べられました。館野・奥村両コメンテーターからは、特に歌木簡をめぐって問題提起があり、講演者も含めて議論が深められました。一般の方を含め約120名が参加。

8月30日(月) 臨地研究「古代の宮と京」

恭仁京～紫香楽宮～平城宮大極殿

◇臨地説明 伊藤太(京都府立山城郷土資料館)

中島正(木津川市教育委員会)

鈴木良章(甲賀市教育委員会)

奈良時代の3カ所の都の跡をバスでめぐり、発掘調査に関わられた方の説明を受けながら見学しました。若手研究者を中心に19名が参加。(奥村和美)



臨地説明を聞く若手研究者ら

古代学学術研究センター 月例研究会

当センターには文理双方を含む様々な学術分野の研究者が加わっています。そこで相互の研究内容を理解し、学際的研究を推進する基盤を作るために、毎月の月例研究会を開催し、各人の研究内容を報告しました。2010年度の内容は次の通りです。(館野)

第1回「平城遷都1300年を迎えて」館野和己(2010/5/12)  
第2回「文化財の微生物汚染とその対策」鈴木孝仁(6/2)  
第3回「奈良盆地の地割をめぐって」出田和久(7/7)  
第4回「空間分析の近年の展開と考古学への応用可能性について」石崎研二(10/6)  
第5回「タンパク質考古学の構想と夢想」中澤隆(11/10)  
第6回「古代日本における口頭言語について」奥村悦三(12/8)  
第7回「日本の古代都市における儀礼空間」上野邦一(2011/1/11)

第39回 奈良国立博物館 夏季講座  
「仏像修理 100年と仏像研究の現在」

2010年8月24日～26日

毎年恒例となっている奈良国立博物館夏季講座を今年も下記の要領で、当センターが窓口となり、奈良博と本学とが共催しました。共催はCOEプログラム実施中の2006年に始まりましたので、今回で5回目となりました。本学講堂を会場に行われた3日間にわたる講座では、開催中の特別展「仏像修理100年」と、奈良博本館の「なら仏像館」としてのリニューアル・オープンにちなみ、修理技術や仏像研究について、第一線に立つ方々の講演が行われました。これには過去最高の600名の方が参加され、会場が満杯となりました。年齢層も幅広く、仏像への関心の高さがうかがわれます。参加者は熱心に聴講され、猛暑のため体調を崩される方が出るのではないかと心配も杞憂に終わり、無事3日間の日程を終了しました。(館野)

開催日：2010年8月24日(火)～26日(木)

主催：奈良国立博物館・奈良女子大学

会場：奈良女子大学講堂

— 8月24日(火) —

挨拶 湯山賢一(奈良国立博物館長)・館野和己

- ・「彫刻史研究と仏像の保存修理」 西川杏太郎(美術院理事長/神奈川県立歴史博物館長)
- ・「滋賀の仏像の保存修理の思い出」 宮本忠雄(元滋賀県教育委員会/元滋賀県立琵琶湖文化館長)
- ・「仏像修理の現在」 奥健夫(文化庁主任文化財調査官)

— 8月25日(水) —

- ・「回想：東大寺南大門の仁王像の修理」  
鈴木喜博(奈良博学芸部上席研究員)
- ・「清涼寺釈迦如来像をめぐる」 井上一稔(同志社大学)
- ・「仏像—研究と鑑賞のあいだで」 副島弘道(大正大学)
- ・「肖像彫刻研究とその課題」 根立研介(京都大学大学院)

— 8月26日(木) —

- ・「運慶と靈驗仏」 瀬谷貴之(神奈川県立金沢文庫学芸員)
  - ・「奈良国立博物館保管の仏像に関する二、三の知見」  
岩田茂樹(奈良博学芸部長補佐)
- 最終日の午後は奈良国立博物館においてなら仏像館・特別展「仏像修理100年」を見学しました。

古代史・環境史プロテオミクス研究  
創成事業との連携

奈良文化財研究所と連携研究協定を締結

奈良女子大学は、「平城宮・京跡等出土のタンパク質含有資料に関する考古学的研究」を進めるため、奈良文化財研究所との間で連携研究協定を2010年10月25日に提携しました。これにより、本センター、及びそれが連携する古代史・環境史プロテオミクス創成事業本部が、これに基づく研究を行うこととなります。期間は2012年3月31日までです。(館野)

共催シンポジウム

古代学学術研究センターでは、古代史・環境史プロテオミクス研究創成事業と共催で、漆工史や墨に関連したシンポジウムを開催しました。

2010年6月5日 シンポジウム「墨」

9月4日 シンポジウム「中国の描金 日本の蒔絵」

2011年1月22日 シンポジウム「夾紵」

地域貢献に関わる活動

奈良県・周遊キャンペーン  
【大和浪漫回廊】の監修協力

2010年秋から2011年春にかけて、奈良県高田土木事務所が中心となり、明日香・橿原を始めた奈良県中和地域に数多くある万葉歌碑や古墳を紹介した、中部、近畿圏のマイカー・レンタカー利用者向けの周遊キャンペーン【大和浪漫回廊】を実施しました。本センターでは、ガイドブックなどの作成に際して、奈良盆地歴史地理データベースから万葉歌碑所在地データを提供し、ガイドブックの監修協力も行いました。キャンペーンは「古墳や歌碑を訪ねるのによいきっかけになった」など奈良県内在住者にも好評だったそうです。(宮崎良美)

期間：2010年11月15日(月)～2011年3月27日(日)

奈良文化財研究所平城宮跡資料館冬期企画展  
『文化財を測る、知る、伝えるの最前線』

奈良文化財研究所平城宮跡資料館冬期企画展『文化財を測る、知る、伝えるの最前線』において、展示協力をしました。地図や測量、地理情報を用いた文化財研究というテーマに関連して、GISを活用する「奈良盆地歴史地理データベース」を紹介するポ

スターとスライドを出展しました。(宮崎)  
期間:2010年11月26日(金)~2011年1月16日(日)

## 国際貢献・文化財活用の活動

### ベトナム都城についての研究交流

NewsletterNo.1で紹介しましたベトナムのハノイ・タンロン城(国際講演会「ハノイ・タンロン皇城遺跡の歴史的位置」2010.2.1開催)が、2010年、建都1000周年を迎えました。これを受けて、ベトナム都城についての研究交流を発表する研究会やシンポジウムが各地で開催されました。

本センターの上野邦一特任教授も、2010年6月27日、日本ベトナム研究者会議研究大会『タンロン・ハノイ一千周年の時空と諸相』(於・京都大学)において、「タンロン皇城遺跡の建物の特徴」と題し、これまで調査してきた遺構に関する研究成果を報告しました。また、2010年10月8日、『タンロン・ハノイ1000年祭記念国際コンファレンス』がハノイ国際会議場で開催され、「洪徳版図の考察」というテーマで、15世紀のタンロン城を描く絵図のなかに表現された建築を詳細に検討した成果を報告しました。(宮崎)

## 研究成果の発表・公開

### 刊行物

2010年度の本センターの刊行物です。

- 『夾紵・乾漆シンポジウム—牽牛子塚古墳から阿修羅像へ—〈シンポジウム記録〉』  
(2010年12月発行:『文化財に含まれる膠の自然科学分析による古代文化史および技術史の解明』プロジェクト)との共編・発行)
- 『都城制研究(5)—都城における坪・町と小規模宅地の検証』(2011年3月発行)

目次

「平城京の小規模宅地」 原田憲二郎(奈良市埋蔵文化財調査センター)

「難波京の条坊区画」 積山洋(大阪歴史博物館)

「長岡京の小規模宅地」 小田桐淳(長岡京市埋蔵文化財センター)

「平安京の小規模宅地」 南孝雄(京都市埋蔵文化財研究所)

「文献史料から見た平城京の小規模宅地と坪付呼称」 館野和己

「文献史料から見た長岡京・平安京と町・戸主」  
西山良平(京都大学)

・『古代学3』(2011年3月発行:目次は次号掲載)

### 奈良盆地歴史地理データベースの公開

当センターでは、奈良盆地の地域的特性を解明するために、藤原京・平城京が営まれた時期を中心とした、古代~中世における奈良盆地の景観復原的研究も行ってきました。その際に利用される多様な情報を相互に関連づけて分析するために、GISを活用した奈良盆地歴史地理データベースの充実と改善のための研究を、21世紀COEプログラム期間以来、継続しています。

研究成果の還元や地域貢献のためにその成果を順次公開する予定ですが、その最初の試みとして、2010年6月に万葉歌碑データベースおよび小字データベースを公開しました。



公開中の万葉歌碑データベースの画面

データベース公開サイトでは、このほかに藤原京遺構データベースや前方後円墳データベースの紹介を行っています。アクセス数の集計をはじめた2010年10月からの半年間で、ホームページへの訪問者はのべ2150人、閲覧数はのべ1万6千ページになりました。(出田和久)

奈良女子大学古代学学術研究センター

Newsletter No. 2

2011年3月31日発行

編集:宮路淳子・宮崎良美

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 205号室

TEL/FAX: 0742-20-3779

URL: <http://www.nara-wu.ac.jp/kodai/index.html>

e-mail: [kodaigaku@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:kodaigaku@cc.nara-wu.ac.jp)